

Eureka IX

六年制通信 No.33 令和4年2月4日(金)号

自分の果汁をためる

先日ある新聞の読者投稿欄にこんな話がありました。子どもの頃、潮干狩りでたくさんアサリが取れたときがあって、ご近所さんにお裾分けをしようと貝をより分けていたそうです。すると母親が「何をしているのか」と咎めて、「そんな卑しいことをしてはならない」ときつく叱ったというのです。何のことかと思ひながら先を読むと、投稿者は自分の家用に粒の大きな貝を選んでいたので、それを見た母親が、その行為を「卑しいことだ」と叱ったのです。投稿者は59歳男性。ですからおそらく母親は昭和一桁生まれでしょう。立派な母上ですね。投稿者は反省し均等に貝を分け、のちにご近所から「あんなに大きなアサリをいただいたことがない」と感謝されたそうです。この人は自分の母親を誇りに思っているのです。この母上を育てたご両親、つまり投稿者の祖父母は明治生まれでしょう。私も、思い出すと、子どもの頃は自分の周りに立派な大人がたくさんいたように思います。何かで読んだのですが、明治維新で武士階級がなくなり、武士が担っていた高い倫理観や道德観、それに恥を知る心などは消滅するかと思われたところ、普通の市井に生きる母親たちがその高い志を受け継いだ。女性は偉かったのです。もちろん今もですけど。

恥ずかしいことをしない、卑怯なことをしない、一度口にした約束は守る、思い出せばこのようなことをずいぶん言われてきたように思います。「自分だけよかったらいいのか」なども小さいころ学校の先生が生徒を叱るとき、よく口にしていたように思います。こういう投稿を読むと、学校の教育もそうですが、家庭を含めた社会の教育と言えますか、本当に大事だと思いますね。「教育を受けた人と受けていない人とでは、生きている人と死んでいる人と同じくらいの違いがある」これは今から二千三百年以上前のアリストテレスの言葉です。彼は「教育の根は苦いがその実は甘い」という名言も残しています。「根は苦いが」の部分が「辛抱強く学ぶ意欲」の「辛抱強く」に当たるのではないかと、私はそう考えています。

子どもは大人の真似をします。これは、言い換えると、子どもはいつも尊敬する対象を大人に求めている、ということです。無意識に求めるものらしい。今生きていなくても構わないのですよ。本の中の人、ひょっとしたら架空の人であってもいいのです。尊敬したり憧れたりする対象がいるというのは幸せなことですからね。前にも書きましたが、逆の対象を持っているのも幸福なことです。絶対にああなりたくないという大人を知っていると(身近にいる必要は全くありませんが…)自分の行動を正しく律することができますからね。

子どもの個性は大人を真似するところから生まれてきます。尊敬する大人と同じことをしがります。真似るところから自分なりの創造が生まれ、それが個性へと成長します。例え話ですが、大人がグレープフルーツをぎゅっと押して果汁を絞り出しているのを見ると子どももしようとしますよね。大人も子どもも果汁を絞り出しますが、その出方は同じではありません。その人だけの「ほとぼしり」があります。それが創造であり個性です。何かを「押して」何かを「外へ出す」、これを英語で **express** 「表現する」と言います。プレスは「押す」という意味、**ex-**は「外へ」。これの反対が **impress** 「印象づける、感動させる」です。**im-**は **in-**で「中へ」。中へぎゅっと押し込むというのが原義です。グレープフルーツの比喻で大切なのは、まず中の果汁を充実させること、それには苦い根に負けずに勉強すること、たくさん知ること、いっぱい感動することです。そして中身にたっぷり果汁を蓄えたら、尊敬する先人の真似をして絞ってみるのです。絞り方を「真似る」＝「学ぶ」のです。同じ絞り方をしても君だけの果汁が出てきます。うまく出なければ、中身がまだ一杯つまっていないのです。あるいは絞り方が下手なのかもしれません。しかし、本当は絞り方など大した問題ではないのです。中身が詰まってくれば自分だけの果汁が自然と出てきます。「物言わぬは腹ふくるわざなり」というのは普通「言いたいことがあれば黙ってなくて言ってしまうなさい、体に悪いから」という意味で使うのですが、私は言いたいこと（でも書きたいことでも何でもいいのです）が溜まってきたら人は必ず黙っていないで何らかの方法で表現に向かう、そういう意味を取っています。さて、君たちもいつか自分だけの「表現」ができるよう、いっぱい果汁をためておきましょう。

今週のおすすめ

・知念実希人 『優しい死神の飼い方』（光文社文庫）

だめだ。知念さんから離れられなくなっている。もうこれで紹介するのは最後にしよう。これはまるで東野圭吾さんが考えつきそうなプロットだと思いましたな。主人公は「死神」（と人間が勝手に呼んでいるが、本人は高貴な霊的存在と言っている。エピローグで本当の呼び方が明かされます）。ある日ゴールデンレトリバーの肉体に宿り、いや宿らされ、雪の中を夏毛で死にかかっているところから物語は始まります。緩和ケア病院の若き看護師菜穂に助けられ、レオと名づけられます。そして患者たちがこの世に残した「未練」を解決していくのです。それぞれ独立したストーリーが最後に一つになります。大変心温まる物語。

誇り高い「死神」が犬に宿ったばかりについつい犬の仕草をしてしまうのが何とも面白く、作者も絶対面白がって書いているに違いないと思います。ちなみに、ラスト、予想通りの展開にホッとします。是非読んでみてください。

『黒猫の小夜曲』も同じモチーフです。今度黒猫に宿らされるのはあの死神じゃないのかと、レオの物語を読んだ人にはピンとくるはずですよ。

さて、知念さんは当分お休み、次週は違う作家の本を紹介しますね。

BGMは Village people の *Y.M.C.A* でした…。